

m²あたり50株以上を混植

都心で「里山」を再現



▲ゴバイミドリが手掛けた在来種の混植で緑化したテラス。ワークスペースから「緑」が望め、心地良い空間に仕上がっている

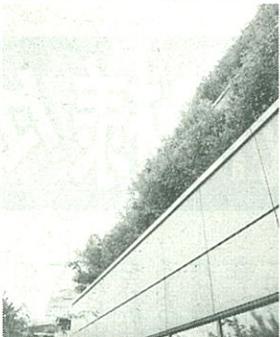
ゴバイミドリ



代表取締役
宮田 生美氏

面にも植栽できるため、既存の緑化ユニットとはケタ違いの植栽量が確保できる仕組みだ。また、金網でカゴを作るので、様々な形にでき、設置場所に柔軟に対応できる。代表取締役の宮田生美氏は「基本はブロック状の『里山ユニット』だが、手すりを組み合わせたたり、階段に採用されるなど、使い方は多岐にわたる」と説明する。平成26年に施工した埼玉県大宮市の大型プロジェクトでは幅37m、高さ16mもの「グリーンカーテンウォール」を実現した。

ゴバイミドリ(東京都新宿区)が提供する緑化ユニットは金網状のウェーブメッシュパネルをカゴ状に組み、内貼りシートを施してから保水性が高く軽量な人工土壌「アクアソイル」を充填して植栽基盤を作る手法。側



▶在来種の混植で緑化したオフィスのために交換して、必要な緑量を確保し、1mあたり50株以上を混植させることで、四うだ。

い。しかし人工土壌は40年間交換不要という実証結果があり、雑草も生えにくい。軽量なため建築物に負荷をかけることもない。施工の早さも同社ならではの魅力といえる。宮田氏は「建物の緑化施工はプロジェクトの最終段階で行われることが大半で、工期が厳しい。そこで施工時期にあわせて事前に育苗場で植物を育て、必要な緑量を確保し、1mあたり50株以上を混植させることで、四うだ。」「日本の在来植物の4分の1は絶滅が危惧されているが、林業の不振などもあり、里山の活用を考えると、里山を都会で再現することだ。緑化ユニットにも相まって里山を維持している。当社では森づくりに取り組む。里山の存在を再認識し、里山の人々と協力体制を築き、緑化ユニット用に草木の供給を受けることと説明する。ビル緑化が社会貢献に通じるよ